CO家族の"手記"

CO闘争は、経過観察者に対する政府資本側の攻撃が予測されるところから、再度重大化する情勢を迎えましたが、このときCO患者家族の会は去る十日現地の会社側代表と会い、問題点について会社側の考えを追及しましたが、依然としてその態度は変るところはなかったのです。ここにこのときの一部始終をしたためた一CO患者家族の会々員の手記を、紹介致します。それによってすべてを察して下さい。

編集部

夜を明かして追及したが ついに回答を聞けず

CO家族の一主婦

もしもこのような人たちが、治療と生活補償を打ち切られでもしたら、どうなるのでしょう。私たちCO家族は、じっとしている気にはなれないのです。

なんといっても、あの爆発を起こした責任は三井鉱山です。ですから、政府が今後を見ないとなったら、三井鉱山こそ責任をもって見て行くべきものです。ところが三井鉱山は、いまのいままで責任ある取り扱いをしてはくれなかった。

労災法の裏がわのかげにばかりかくれて、その枠の内からしか見てはくれなかった三井。こんどはいままでのようなことでは済まされない。それだけひどいCO患者にかかわることなのですから。

はじめは丁重だった会社代表が……

私たち家族は組合におねがいして、山元の直接の責任者である労働課長代理に面会を求め、ようやく十日の午後二時から話し合いにはいることができました。

六時間余りも、家族の一人ひとりが主人たちの苦しみ、家族としての苦しみ、たとえようのない悩みを訴えました。会社の態度も、やや丁重に聞いてもらった感じでした。

でも話し合いが進み、いよいよ「もし政府が治癒したとして、治療その他の補償を打ち切った場合は会社が責任をもってほしい。また七月の協定の中で、長期給付受給患者で停年になる人は、停年後二年間は福利厚生を提供するが、あとは四十万円で会社は縁を切ってしまうことになっている。その四十万円は、いったいどんな計算で出てきたものか、どうしても納得できないので説明してほしい」というところまでくると「うん」とも「すっ」とも返事はありませんでした。

うって変って威圧的になってきた

頭をかかえこんでいましたが、「中座する」ともなんともいわないで、さっさと別室へひきあげていってしまい、再び私たちの前に現れたときは、以前の態度とはうって変って威圧的になり、事務的な語調でのぞむなど、その豹変ぶりに、これが本音を吐いた三井鉱山の姿かと、いまさらのように見せつけられた思いでした。

私たちは、そんな威圧にひるむもんかとせまり、会社側がその態度を改めるよう要求しました。がその後は一歩の進展もなく、こんどはほんとに席を立って出ていってしまいました。以後夜なかの三時になっても、会社の態度はついに変らなかったのです。

帰るに帰られず

私たちは話し合いましたが、だれもがやっぱり「このままでは帰るに帰れない。たとえ夜明かしてでも会社の反省を促すべきだ」となり、ついに朝を迎えたわけでした。

これほどまでも犠牲にされた者に対して、加害者である三井鉱山は一人としてその責任さえ問われないばかりか、そのときの最高責任者だった社長の栗木幹なんか「社会的な功労者」として勲章まで受けているのだ。このことを、私たちはいったいどう理解したらよいのか。いまの社会は、まったく狂ってしまっている——あれこれ考えはじめますと、私は腹立たしくなってくるのをおさえることができなかったのでした。

手記を読む泰代ちゃん

泰代はとてもうれしかった

この間私は、体育かんのしゅうかいでなつやすみの日記を読んであくる日学校へいくと、みんなテレビや新聞をみたらしく、「どうだった」とか、「どんなのを読んだんだ」とかきかれて、なにかちょっとはずかしかった。

おじいちゃんやねえちゃんが、はやさもこえもとてもよかった、あれを読んだときのたいどがよかったといったので、うれしかった。

それに、あのときの写しんありがとうございました。

だは、さようなら。

泰代より

組合のおじちゃんへ

×

この便りは、一一・九三池災害抗議大集会で、小学校の二年生でありながら、みんなの前で自分の日記をしっかりと読んで感動させた、溝口泰代ちゃん（大災害犠牲者＝泉さんの遺児）の便りです。泰代ちゃんの住居は「大牟田市小浜北社宅一棟」です。大いにはげましてゆきましょう。

水俣病患者の決断にはげまされて

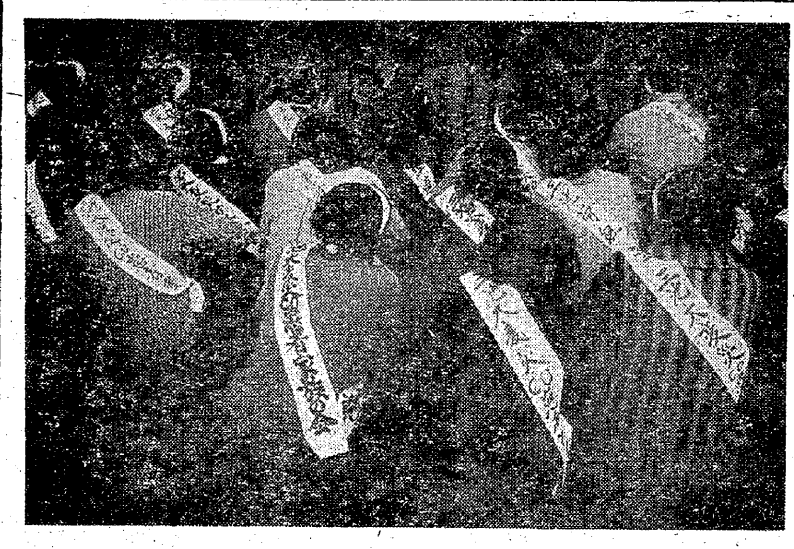
でも、腹立てばかりはおれないのです。私たちはやっぱりくじけず、ねばり強く、一つひとつの問題を相手につきつけながら闘っていく以外に道はないのだ、ということに思いあたりました。いま社会的に大きな問題となっている水俣病の患者さんたちでさえ、長い間の苦しみにも負けず立ちあがり〝血書〟までしたためながら、冷い東京本社の廊下に座りこみを続けていられるのです。その精神力こそ、私たちがまなぶべきことであり、他力本願では会社の責任を追及することなど、およそできないことだと知りました。

その夜、私たちCO患者はまんじりともしないで夜を明かしました。私たちは会社側と交渉するなかで他の公傷患者——とりわけいい肺患者の皆さんのことも訴えましたが、私たちはこれからもこのような患者の皆さんと手を取りあいながらがんばっていかねばならないと、いま強く思っているところです。

×

なおこんど政府・資本の攻撃が集中してくることが予想される〝一時経過観察中のCO患者〟数は次の通りである。

三池労組関係	四六人
新労組関係	一二人
職員組合関係	五人
組夫関係	一人
合計	六四人



なぜ会社は、CO家族に会おうとしないのか？

「七級認定、七級認定」ということを指標にかかげ闘ってきた闘争も、認定と同時にいろいろ問題点を残しながらも一応ピリオドを打ちました。障害等級に対する異議申請を、一部の人がだしてはおりますが。

追いうちをかけるように、今度は政府は、一時経過観察中の患者への攻撃の矢を集め、長期傷病給付にするか、それとも補償を打ち切るか、の断を下そうとしております。

いったいどれほどの差なのか？

一体、経過観察にされている患者と、長期給付を受けている患者と、どこがどれだけの差があるでしょうか。いまだに色の別のわからない人、字が書けない人、簡単な計算さえできない人、もの忘れのひどい人、おフロにさえ一人では満足にはいれない人、極端に手足の機能をおかされて、元通りになれない人、内臓や性器にひどい機能障害をうけている人、その人々はそれぞれに異なった症状に苦しんでいるのです。

がんばらなくっちゃ

原万田分会　岩田ヨシ子

お得意さんもふえ、まあまあ安定した収入を得るようになった。でも私はこのままでいいのかしら？　何かしなくちゃ、とあせり気味の昨今。

自動車学校にでもいって、眠りかけた脳を目覚めさせようと家族に協力を願み、自動車学校へ入学した。

入学当日適性検査を受け、視力左〇・七、右〇・七にまずショック。目は一・二なんだからと自信があったのに。

「動作やや劣る」——にまたショック。教習第一日目に——

「奥さん、トシをとると若い者みたいにはいかんですよ。気長にいかんとね」

と、先生に年寄りあつかいされてまたショック。若いつもりでいたのに。

何くそっ。若い者には負けないぞ。きっとストレートで合格して見せるぞ、とはりきって通いはじめた。

仮検—総合見きわめ、と無事通過。好調な日々を過ごしていった。そして、いよいよ本番の検定の日を迎えたのである。

「皆さんは未熟な点があって不合格になられたのですから、あせらずに十分練習をして、月四回の検定にまた受験して下さい」

つれない言葉だったが、こうしてストレート合格の夢は消えうせました。

二十七日間も、いろんな面で協力してくれた家族に何と言おうか。本当に、頭は痛かった。頭の中では、ああして、こうしてと考えていたのだけれど、どうも手と足がいうことを聞いてくれなかったのである。私も本当にトシなのかなア。もっと若いうちに受けておくべきだった、との後悔もあった。

この原稿が活字になった新聞を手にするころは、すでに免許証を手にしていて、今のにがい経験を笑い話しのタネにしたいものである。

本当にがんばらなくっちゃ。

岩田さん

×

岩田さんのお住居は「荒尾市原万田社宅五十五棟」です。なお岩田さんは、その後立派に自動車の運転試験にパスされたそうです。

家族会が抗議

七十七銀行従組家族会は、従組員が第一組合員であることを理由に賃金差別されていることについて十一月二十七日「うちの主人は同年入行社に比べ、賃金が半分なのはなぜか」「月六万円で生活できると思うか」と人事部長たちに抗議。銀行側は「きょうはお聞きするだけ」と無言だったが、主婦たちの追及に「それは賃金体系からくるので……」と返答。「体系は問題ではない、差別をやめて生活できる賃金を」と逆にやりこめられた。（鈴木通信員）【連合】